

第 51 回 歴史探訪の会 「三重県・松阪・斎宮歴史博物館」を巡る

開催：平成28年7月20日

案内人：内海春樹（2579）



今年の梅雨は平年より早く明け、夏の日差しが目に眩しく感じる朝、天王寺公園前から観光バスは 24 名の会員を乗せ伊勢路を松阪に向けて進みました。11 時前松阪市の中心に到着、まず“松阪商人と三井家発祥の地”を散策する。

・松阪における商人の歴史は、蒲生氏郷が 1588 年松阪に城を作った時、自由に商工業が営む事が出来る“楽市楽座”の制度を取り入れ、蔵方・商人・海運業者などを近江・伊勢から招き城下町としての繁栄を図った。1619 年紀州藩に組み入れられた後も江戸に進出した松阪商人たちは紀州藩の藩札発行を任されるほどの豊かな経済力を持った。中でも三井家・小津家・長谷川家は紙・木綿・呉服・両替商などで江戸を始め各地で大きな商いをした。特に三井家は、三井財閥の祖と仰がれる三井高利が若年の時から手代として商いを学んだあと、大名貸しなどで資金を貯め、「越後屋」を創業。京都に 5 店、江戸に 3 店、大阪に 1 店を構える大店となった。明治以降両替部門が“三井銀行・三井財閥”に発展し、呉服部門は独立して“三越百貨店”となった。今もこれら豪商の屋敷はそのまま軒を連ね、その堀越しには豪邸を表す“見越しの松”が見られる。



三井家発祥の地を示す標識



三井家発祥の地



小津家の邸宅(松阪商人の館として公開されている)



古い街並みが残されています

・御城番屋敷(国の重要文化財)

槇垣と石畳をはさんで静かに息づく歴史空間、ここは文久3年(1863年)に建てられ紀州藩士が松阪城警護のため移り住んだ武家屋敷である。8畳と6畳それぞれ二間を有する10軒長屋が2棟並ぶこのような組屋敷は全国でも珍しく、今も5軒の子孫を始め多くの人々の暮らしが営まれている。ボランティアガイドから、江戸末期から現在までのこの長屋の運営の変遷についての説明を受けた。

明治維新後、各地の武士が家禄を失い生計に苦勞した中で、ここの武士は生き残りをかけた才覚の優れた人物を中心に子孫の絆が現代に続いている。立派な床の間を有する広い居宅と、前後の庭から通る風も涼しく150年経った今でも快適な暮らしが出来ている事に納得。



御城番屋敷の槇垣と石畳、この両側に屋敷が並ぶ。現在もここに住み生活をしている人達がいま



御城番屋敷のうち一棟が公開されている



公開されている屋敷の内部

・本居宣長(もとおりのりなが)記念館

7月からリニューアル工事のため休館になっているが、我々のために今日一日特別に公開してくれ、学芸員の説明も聞く事が出来た。国学の大成者として知られる本居宣長は、享保15年(1730)に松阪で木綿を売る商家の二男として生まれた。医師を目指し京都へ遊学し、医学と共に国学に傾倒していく。松阪に戻り医師を開業すると共に国学者としての体系を確立する。

“もののあわれ”など日本人の心を追及し、当時解読不能とされていた古事記をまとめた「古事記伝」を始め、「源氏物語」や「万葉集」など数々の研究書を著し、その名声を聞いて集まった弟子は500人を超えた。全国に存在する天皇・皇族などの陵墓などの研究も行った。

天明7年(1787)には紀州藩に召し抱えられ、享和元年(1801)

72歳をもって没した。展示室では古事記伝や15歳の時に書いた“書”など多くの文章の筆使いはどれも美しく、自画像も多く残されている。係りの人のご厚意で涼しいホールで昼食もさせて戴きありがたかった。



本居宣長の邸宅跡。邸宅は移設されたが、当時の松は残されている



本居宣長記念館で学芸員の説明を聞く



記念館の傍に移設された本居宣長の住んだ屋敷

・松阪の町を造った蒲生氏郷

蒲生氏郷は弘治 2 年(1556)、近江国日野の名門蒲生家の跡取りとして誕生。13 歳の時、人質として織田信長のもとに送られた後、多くの戦で活躍し信長から身柄開放と娘の冬姫を妻に迎えられた。

日野に戻った後も戦で自ら先頭に立って闘う強者ぶりを見せる一方、信長のもとで学んだ城下町づくりの手法を取り入れ、領内の行政、経済の改革に着手。日野は大きな繁栄の時代を迎えた。

信長が光秀の謀反により絶命した後は、秀吉の傘下に入り反乱を企てた北畠氏と伊勢で激突。次々と敵城を攻略し、伊勢を平定。天正 16 年(1588 年)松坂城の築城と城下町の整備を行うも、2 年後、天正 18 年(1590 年)に氏郷は、小田原の役の軍功により陸奥国会津 60 万石の大大名として会津に移った。

・松坂城

天正 16 年(1588)、豊臣秀吉の命により蒲生氏郷が築いた城である。

城郭は参宮街道に面する東側を大手、御城番屋敷のある南側を搦手とし、標高 38M の天守台を頂点として本丸・二の丸・三の丸といった郭を階梯式に設けた平城である。北の坂内川と南の愛宕川を外堀として、内側に周囲 2100M の内堀を巡らせ、城下町には寺院を外縁に並べ、街路を屈曲させるなど防衛に工夫が凝らされている。

天守は 1644 年に台風により倒壊、その他の建物もことごとく焼失した。

今日の特別講座は松坂城の立派な石垣の前で、「石垣」について案内人からその歴史・工法などの説明を受けた。近世の城郭の石垣は、自然石をそのまま積み上げる“野面積み”に始まり、時代を経て“打込み接ぎ(うちこみはぎ)”“切込み接ぎ(きりこみはぎ)”の技法、また隅石には“算木積み”と強度を増してきている。

石垣の技術者集団として有名なのが近江坂本の“穴太衆”でその心は「石の声を聞く」で今に継承されている。



松坂城跡にて



松坂城本丸跡



松坂城跡から市街を眺める

写真中央から右に長く続く屋根が御城番屋敷

・斎宮歴史博物館

1 時半ごろ松阪を後にしてバスで多紀郡明和町に向けて進む。2 時に斎宮歴史博物館に到着、我々の為に臨時に「斎宮と斎王」についてのビデオを大型画面で見せて戴く。引き続いて、学芸員の先生から二つの展示場で説明を聞いた。

斎宮は「いつきのみや」とも呼ばれ、天皇が即位するたびに選ばれて伊勢神宮に仕えた斎王（いつきのひめみこ）の宮殿と、彼女に仕えた官人たちの役所である斎宮寮を指す言葉である。斎王は、天皇に代わって伊勢神宮に仕えるため、天皇の代替わりごとに皇族女性の中から選ばれて、都から伊勢に派遣された。古くは、伊勢神宮起源伝承で知られる倭姫命（やまとひめのみこと）など伝承的な斎王もいる。制度上最初の斎王は、天武天皇（670 年頃）の娘・大来皇女（おおくのこうじょ）で、制度が廃絶する後醍醐天皇の時代（1330 年頃）まで約 600 年間続き、その間記録には 60 人余りの斎王の名が残されている。



斎宮があったとされる場所に復元された建物(車窓より)

斎王は、天皇が即位すると未婚の内親王（または女王）の中から、占いの儀式で選ばれた。斎王になると潔斎の日々を送り身を清め、その翌年9月に、伊勢神宮の神嘗祭（かんなめのまつり）に合わせて都を旅立つ。出発日の朝、斎王は野宮を出て葛野川（現在の桂川）で禊（みそぎ）を行い、大極殿での発遣の儀式に臨む。大極殿で天皇は、斎王の額髪に小さな櫛を挿し、「都の方におもむきたもな」と告げる。この儀礼は、発遣儀式のクライマックスともいふべきもので、平安文学の中では「別れのお櫛」という名で呼ばれている。



斎宮歴史博物館

発遣の儀式を終えると斎王は葱華輦(そうかれん)という輿に乗り、伊勢へと旅立つ。群行(ぐんこう)と呼ばれるこの旅は、斎王に仕える官人・官女に加え、京極まで見送る勅使など 500 人を越える壮麗なものであった。一行は、近江国の勢多(せた)・甲賀(こうか)・垂水(たるみ)、伊勢国の鈴鹿(すずか)・一志(いちし)に設けられた仮設の宮、頓宮(とんぐう)に宿泊し、5泊6日の行程で伊勢に赴いた。

映像と説明を聞いて感じたのは、これは京都三大祭の一つ「葵祭と斎王代」と非常に似ていると云う事。葵祭はこれを参考にして伝えられたものであろう。それにしても 660 年で 60 人余りの斎王がいたそうだが、中には 7 歳で斎王に選ばれた娘が、父(天皇)と再び会えない事を覚悟して伊勢に赴く気持はどんなだったか計り知れない。



斎宮歴史博物館にて

今回は本居宣長記念館、斎宮歴史記念館など、めったに行けない所を見学でき、またシャープ OB 会と言う事で色々便宜を払って戴いたことが参加者にとってうれしい事でした。

時刻 6 時半ごろ全ての予定が無事に終わり天王寺で解散しました。